

概要

深田B古窯は、境川に面する丘陵の北側に位置し、SY-1(深田B1号窯)のみ見つかりました。調査区外となる北側に窯跡が続く可能性があります。灰原は残存していませんでした。

深田C古窯は、同じ丘陵の南側に位置し、SY-1～12(深田C1～12号窯)が見つかりました。大きく南側の一群(SY-1～7・12)と北側の一群(SY-8～11)に分かれます。両者の間は、やや傾斜が強く、窯を築くのに適さなかったのかもしれませんが。灰原も2つの範囲に広がり、それぞれSY-1～5・12とSY-8～11のものと考えられます。

今回見つかった窯跡は、二時期に分かれます。ひとつは7世紀末から8世紀初めごろ(深田C1・2・4・6・8～11号窯)で、もうひとつは8世紀後半(深田B1号窯、深田C3・7号窯)です。深田C5号窯は、出土遺物量が少なく時期は現在検証中ですが、窯跡の大きさや形状から8世紀後半の可能性がありますが。深田C12号窯は後世の削平により大きく減失しており、出土遺物や形状など詳細は不明です。周囲で出土した遺物から、7世紀末から8世紀初めごろの窯跡の可能性がありますが。今回の調査で確認できた二つの時期は、おおむね深田D・F・G古窯(2019年度調査)のものと同様と考えられます。

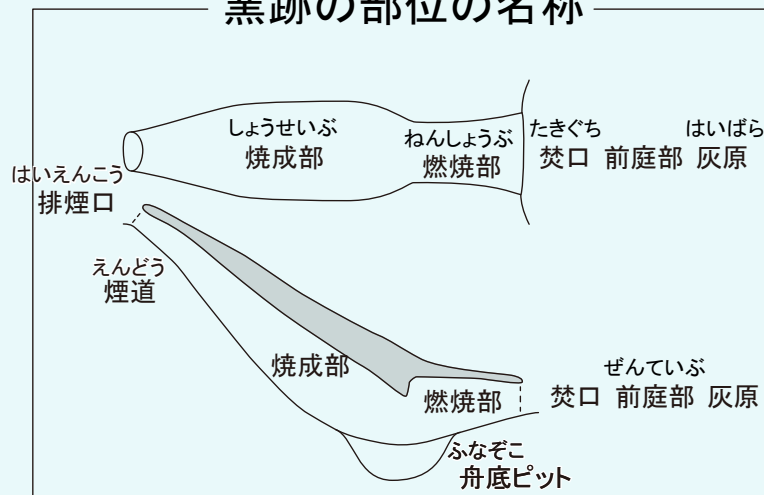
天井部

発掘調査で見つかる窯跡は、天井のないものがほとんどです。これは、本来トンネル状に掘られたものの、崩落するなどして失われたためと考えられます。しかし今回の調査で見つかった窯跡では、深田B1号窯、深田C4・8・10号窯、計4基で天井の一部が残存していました。こうした事例は希少で、窯跡本来の形状を考えるうえで非常に重要な調査となりました。



深田C10号窯・天井残存部

窯跡の部位の名称



煙道

今回の調査で見つかった窯跡は、深田C3・12号窯を除き、窯体の大部分が残存していました。そのため、窯跡ごとに個性的な形状や構造をもつことがわかりました。特に煙道部の形状は以下の3つに大別できます。

① 焼成部から煙道部にかけて徐々に傾斜が強くなっていくもの(深田B1号窯、深田C5・7号窯)。
② 煙道手前に、奥壁として段が設けられ、煙道部が斜面になるもの(深田C1・4・8～11号窯)。
ただし深田C8・11号窯では、何度も使用されていく過程で、段が埋められ、最終的には段がほぼなくなり①のような形状になっていたと考えられます。

③ 煙道部手前に、奥壁として段が設けられ、煙道部が階段状になるもの(深田C2・6号窯)。
この形状は湖西古窯跡群の特徴とされる構造で、豊橋市内では初めての例となります。ただし深田C2号窯では、途中で段が埋められ、①のような形状に作り替えられたと考えられます。また、湖西市で見られる②③のようなタイプの窯跡では、1段目が1m以上の高いものが多いのに対し、深田古窯址群ではおおむね0.5m未満と低くなっています。



深田C5号窯



深田C9号窯・煙道

はいすいこう排水溝

窯跡では、前庭部などに排水溝を設けるものが見られます。今回の調査でも、深田B1号窯、深田C4・7・8・10号窯、計5基で排水溝が確認できました。深田C10号窯では、床下の暗渠から前庭部の排水溝へと続きます。暗渠は、甕の破片によって蓋がされていたと考えられます。



深田C10号窯・暗渠および排水路



深田C6号窯・階段構造

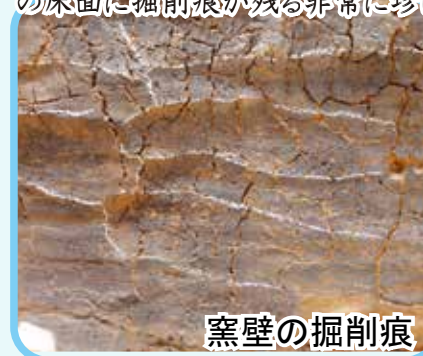


深田C2号窯・階段構造

※左側は階段構造、右側はそれを埋めて斜面に作り替えた床面。

くっさくこん掘削痕

窯跡では、窯を築く際につけられた掘削の痕跡が観察できます。主に窯壁で顕著に見られますが、深田C7号窯のものは、焼成部奥から煙道部にかけての床面に掘削痕が残る非常に珍しいものです。



窯壁の掘削痕



深田C7号窯・掘削痕

遺物

出土遺物には、坏や蓋、皿、盤、壺、甕などの基本的な器種に加え、壺の脚台部と考えられる獣脚や、漁の際に用いるおもりと考えられる陶錘などが確認されました。また、深田C11号窯の中からは、坏と蓋が重なるように出土しました。埋没後に製品を重ねて置いたと考えられ、儀礼などに使用された可能性があります。



深田C11号窯